

Chapitre III : Écrire

I. 論文の書き方

論文とは詩でも小説でも随想でもなく、ひとつの問を立て、その答えを出すことでしょう。つまり簡単に言えば、「これは・・・ではないだろうか」と問い、いろいろと考察を行った後、「これは・・・である」と答えるわけです。この問いを立て提示する部分が序論になるわけですが、そういうわけですから、実はここですでに結論が予想されているのであり、これにつづく本論はいわば、疑問形で言ったものを肯定形にするための手続きにすぎないと言えなくもないでしょう。それゆえ、序論はきわめて重要であり、この部分が完成すればもうほとんどできたといいぐらいなのですが、逆にまた一番苦勞するのも、また苦勞しなければならないのも、この部分ということになります。

序論とはまずなによりも問題を読者に分かるようにきちんと提示する場所です。そのためには「藪から棒」に問いを投げ出すのではなく、この問いが見当はずれのものではないこと、十分に根拠のある問いであることを示さなければなりません。難しいのはこの所で、経験の少ない人はしばしば、本論で言うべきことをここでながながと言ってしまうことがあります。それは頭の中が十分に整理できていないからで、本論で言うべきことと序論で言うべきことを区別し、序論では問題を説明するのに必要な最低限にとどめておくべきでしょう。そのためにも、論文全体の構成がしっかりできていなければなりません。序論が完成すればもうほとんど出来上がったようなもの、と言ったのはそういう理由からでした。

とはいえ、自分なりの構成が出来上り、これでよしと書き始めたところが、どうもうまくゆかずに、行き詰まってしまうこともあります。それは問題そのものが間違っているのではないとすれば、構成に無理があるわけで、いつまでも固執せずに最初から書き直した方が早道という場合が多いようです。だが、それは決して無駄ではなく、何度か書き直してゆくうちに、肝心なおへソのところに探り当たることになり、それから先は快調に筆が進んでゆくはずですから。だがさらに、こういう場合もあります。書いてゆくうちに自分の認識が深まったり、自分の思い違いに気づいたり、新たな発見が生まれたりする場合です。頭の中で考えているだけの時よりも、実際に書いてゆく過程においてこうしたことは起こるものです。ぼく自身も『デカルトの旅、デカルトの夢』(岩波書店)という本を書いた時、そういう経験をしました。書いてゆくうちにいろんなことが新たに分かってゆき、最初の考えとすっかり変わってしまったのです。よく小説家が、主人公が勝手に動きだして、最初は自殺させるつもりだったのに、ちっとも死んでくれなかったなどと話すのを聞くことがありますが、それと同じで、デカルトが勝手に動きだして、ぼくを引っ張っていつてくれたような気がしています。ですから、最初の考えで最後まで押し通すのではなく、書き直すことを予想しておいた方がいいと思います。ぼくが卒論の学生たちに、書き出せそうだと思ったらすぐに書き出してみろと勧めるのはそのためなのです。

「構成法」論文や演説などの論述の仕方については、古来いろいろと考えられてきました。三段論法、弁証法、修辞学などです。中国の起承転結などもその一つと言えるでしょう。こうした方法を学んだからといって論文が書けるわけではありませんが、論文の内容を整理したり構成したりするのには役に立つと思いますので、以下簡単に説明しておきたいと思います。

§1. 弁証法 (Dialectique)

ソクラテスの問答的対話術を引き継いだプラトンはその著作のほとんどを対話形式で書いているが、それは対話を通じて次第に真理に近づいてゆく発見の方法でした。例えば、「群盲象を撫でる」という言葉がありますが、ある人は象の耳を触って「象とは平たい板のようなものだ」と主張する。

これに対し足に触った別の人は「象とは太い丸太のようなものだ」と言って反対する。そのどちらの主張も真理には到達してはいませんが、まったく間違っているのでもなく真理の一部を含んでいるのであり、この論争を経て「平たい部分と丸太のような部分を持つもの」というより高度な認識に達するのです。つまりテーゼ(正)に対してアンティ・テーゼ(反)が立てられ、それが止揚(Aufheben)されてジン・テーゼ(合)に到達するのですが、このジン・テーゼに対してまたアンチ・テーゼ(例えば、鼻に触れた人が長いホースのようなものだとし新しい主張)を提出され、それがさらに総合され、こうして少しずつ真理に近づいてゆくことになるのです。

ある学生は卒論で、ゲルマン系アングロ・サクソン人の言葉である英語は当然ゲルマン系の言語であるはずなのに、どうしてフランス語に共通するラテン系の言葉がこんなに多いのかと疑問を抱き、英語の基本単語を調べてみました。そしてその結果、驚いたことに、ラテン系の言葉がゲルマン系の言葉をはるかに上まわっていることを発見したのです。そこからこの学生が引き出した結論は、ノルマン・コンクエストによって支配階級の言語と一般民衆の言語という二重構造が生まれ、いわゆるキングズ・イングリッシュはゲルマン系とラテン系の混血児であるというものでした。つまり、英語＝ゲルマン語(正)という常識に対して疑問(反)を提出し、その両方を総合する結論(合)に到達したのです。この結論にはまた新しい観点から疑問が提出されることになるかもしれません。しかし、この学生は基本単語を丹念に調べることによって、認識を一步真理に近づけたと言えるのです。つまり、定説を批判しつつ、より高い認識に達しようとする型の論文はいわば弁証法的ということになるでしょう。

弁証法はその後ヘーゲルやマルクスやエンゲルスによって発展させられ、生成流転する存在そのものの理法とされてゆくことになりますが、それについては、ここではふれないことにします。

§2. 三段論法 (Syllogisme)

アリストテレス論理学の中心をなす三段論法は、中世スコラ学の基本としてさらに精巧なものとなりましたが、二つの前提命題(大前提と小前提)から一つの結論命題を導き出すこの推論法は、発見の方法である弁証法とは違って、既知の事柄を論証し相手を説得するための術だと言えるでしょう。その命題つまり名辞と名辞との関係は次の四種類、1)すべての A は B である、2)ある A は B である、3)いかなる A も B ではない、4)ある A は B でない、であり、これらの命題の組合せは 4 の 4 乗で 256 あることになりますが、そのうち成立するのは 24 だけです。もちろん、ここではその 24 の格式をすべて説明してゆくわけにはいきませんので、最も代表的なものだけを例に上げることにしましょう。

例えば、“すべての動物は生物である”という大前提と“すべての人間は動物である”という小前提から、“すべての人間は生物である”という結論を引き出す格式ですが、ある学生の次のような卒論はこれに相当するものと言えます。この学生はケルト美術がギリシャ・ローマ的現実主義とはまったく異質な超現実主義であることを述べた後、このケルト的精神はギリシャ・ローマの文明の底層流として生き続け、しばしば表層に噴出してきたと考え、アンドレ・ブルトンらのシュルレアリスム運動もまたこのケルト精神の噴出であったと結論したのですが、これを三段論法の形に整理すれば、大前提:「ケルト精神は超現実主義である」、小前提:「ブルトンたちの運動は超現実主義である」、結論:「ゆえにブルトンたちの運動はケルト精神の噴出である」ということになります。

またある学生は、アゴラフォビーと不安を与えるヴェルサイユ宮殿の庭園は普通の意味における庭園ではなく、巨大な演劇空間、バロック的祝祭空間、絶対王政の演出の場であることを明らかにしようとしたのですが、その論理は、大前提:「庭園の定義は快適な守られた空間である」、小前提:「しかるにヴェルサイユ庭園はそうではない」、結論:「ゆえにヴェルサイユ庭園は普通の意味における庭園ではない」という風に整理できます。

§3. 修辞学 (Rhétorique)

三段論法はたしかに論理的には正しいかもしれませんが、それで人を説得することができるかという、それは必ずしもそうではありません。例えばデカルトの神の存在証明、「わたしの内に神の観念を見いだすことができる」、「原因はつねに結果より大であるから、この完全にして永遠なるものの観念が不完全なわたしから生じたものではあり得ない」、「ゆえに、この観念は実在する神から来たものである」が理屈としては納得できたとしても、だからといって、無神論者が神を信ずるようになるとは思えません。パスカルが「デカルトはなんの役にも立たない」と批判したのはそのためです。スコラ哲学の時代につづくルネッサンス時代になって修辞学が論理学に代わって登場してきたのもまさにそのためでした。もう論理だけでは誰も説得できなくなってしまうていたのです。手振り身振りや声の抑揚などによって聞き手を巻き込んでしまう雄弁ばかりではなく、論説においても、豊かなイメ_ジや比喩、意表をつく逆説などによって知性ばかりではなく感情にまで訴えて説得するのが修辞学です。デカルトを役に立たないと批判したパスカルの『パンセ』はまさにこうした修辞学のお手本と言ってもいいでしょう。

ギリシャに始まり、ローマに引き継がれてさらに発展した修辞学は、クインティリアヌスの『弁論術教程』12 巻に集大成されましたが、それは五部門に分かれており、(1) 主題の立て方、(2) 内容の配置の仕方、(3) 修辞、効果的な言語表現を与える技術、(4) 記憶術、(5) 発声、表情、身振りなどの発表に際しての技術となっています。しかし、そのうち最も重要なのが第三部門であり、普通はこの第三部門を指してレトリックと呼んでいます。人々は学校でキケロなどを教材としてこの修辞の訓練を受け、政治家や弁護士などになっていったわけですが、ここではそれを具体的に述べてゆくわけにもゆきませんし、またその必要もないでしょう。それよりもここでは、この修辞学にたいするデカルトの批判を見ておきましょう。それは『方法序説』第一部の中の次の一節です。

「わたしは雄弁をたいへん尊重し、詩には夢中になっていた。しかしわたしは両者がいずれも、学んで得られるものであるよりは、むしろ生まれつきの才能であると思った。きわめて強い推理力を持ち自分の思想を最もよく秩序づけて、それを明析にかつ理解しやすくしうる人々は、たとえ彼らが低ブルターニュ語しか語らず、修辞学を一度も習ったことがなくとも、自分の述べるところをいつも最もよく人々に納得させるのである。」

修辞学など学ぶ必要はない。もちろん、三段論法も弁証法も。要するに、自分の考えをきちんと整理し、それを順序立てて分かりやすく述べることであれば、必ず人に理解されるのだ、とデカルトは言っているのですが、実はこれこそがデカルトの「方法」に他なりません。デカルトはそれを方法の四準則という形でまとめているのですが、それは数学の解法をモデルとしたもので、複雑な問題を単純な命題に分割して(分割の規則)、それを理性の光に照らして明証し(明証の規則)、次にそれらをふたたび順を追って総合してゆき(総合の規則)、最後に何も落とさなかったか検証する(枚挙の規則)というものです。これはそのまま相手に納得させる手順でもあるでしょう。われわれもまた、三段論法も修辞学も学ぶのをやめました。デカルトの言うように、考えをきちっと整理し、それを順序立てて分かりやすく述べればそれでいいのです。だが、三段論法の形式や弁証法について多少知っておくことも、問題を整理し順序を立てる時には、多少の役には立つことでしょう。さらに進んで『パンセ』のようなものが書ければ、これはもう素晴らしいといえようありませんが。

§4. 起承転結 (合)

西洋の伝統とは別に、東洋にも一つの伝統的な修辞法がありました。起承転結と言われるものです。これは誰が言い出したのかは分かりませんが、詩人たちの口伝として絶句や律詩の作法として伝えられてきたものです。十三世紀の元の揚載の『詩法家数』はこれを説明して、絶句の場合は、起承二句は平直に始めておだやかに承け、第三句で転じて工夫をめぐらし、第四句は流れを下る舟のように全体を収束させよと述べています。第三句に変化を与えることで単調さを破り、感動を高

めるのです。これを具体的に見てみましょう。有名な孟浩然の五言絶句です。

春眠不覺曉(春眠曉を覺えず)
处处聞帝鳥(諸処に鳥の鳴くを聞く)
夜來風雨聲(夜來風雨の聲)
花落知多少(花落つこと 知る多少)

作者は朝寝坊をしていて、布団の中で夢うつつに鳥のさえずりを聞いています。そこで彼は目を覚まして、そういえば夜中に風や雨の音がしていたなと思い出し、起きていって庭を眺め、花が少し散っているのを知った、というのですが、この第三句が転に当たるのです。次は杜甫の五言律詩です。

昔聞洞庭水 今上岳陽樓(昔聞く洞庭の水 今上る岳陽樓)
吳楚東南裂 乾坤日夜浮(吳楚東南に裂け 乾坤日夜浮かぶ)
親朋無一字 老病有孤舟(親朋一字無く 老病孤舟有り)
戎馬関山北 依軒涕四流(戎馬関山の北 軒に依りていし流る)

一聯目は昔話に聞いていた洞庭湖を今はからずも岳陽樓の上から眺めていると静かに語り起こし、二聯目はそれを承けて、吳と楚の両国がこの湖によって隔てられ、天地の万物が昼も夜もこの湖に影を浮かべていると、その情景を描いた後、一転して、打ち続く戦乱のため親戚や友人からの手紙もなく、老いて病む自分を託すのはこの小舟だけだと、自分の悲しい状態を嘆き、最後に関所の山の北の都では相変わらず戦乱が続く、この高樓のですりによりかかって、あれこれ考えていると涙ばかりが流れてくると一気に結んでいるのです。

これはもちろん元来は詩、それも絶句と律詩についての技法であったわけですが、やがては広く、戯曲、小説、音楽、舞踏などについてもいわれるようになりました。これは論文などの場合にもやはり適用できるのではないのでしょうか。ぼくはそう思っています。論文の場合、起は序論における問題提起です。次に本論でこの問題を詳しく発展させるのが承、そして次の転でそこに新たな視点を持ち込んで解決に導き、そこから一気に結論を引き出すのです。これは三段論法の理屈だけの無味乾燥さに比べれば、ずっと修辞学に近く、説得的であるように思えるのです。次はぼく自身の書いた書評で(『エコノミスト』1969年9月2日号)、例文として引合いに出すのはいささか気がひけるのですが、小論文の起承転結を示す例として引用させていただきます。

昨年の夏、私は大学紛争の解決を夢みながら、おそろおそろ学生の大学行政への参加を主張する論文を書いた。秋には文部省までが口にするようになる学生参加も、その頃はまだとんでもないという空気だったからだ。それからちょうど一年。今私は学生参加というようなことではなんの解決にもならないと考えている。最初私はこの紛争を表面的に制度改革の問題、大学の近代化の問題として捉えていたにすぎない。今にして思えば、昨年の六月頃に早くも老ピエール＝アンリ・シモンがル・モンド紙上で指摘していたことは卓見であった。彼はフランスのいわゆる五月革命を論じて、それは表面的には制度改革の問題であり、その次元においては、たとえ技術的な困難があるにせよ、問題の性質としては単純なのであるが、これをさらに掘り下げてゆくと倫理の問題(彼によると文化の階級性の問題)にぶつかり、さらにその先に進むと、「教える」とは何かという最も深い問題に突き当たるというのである。この指摘は日本の場合にもほとんどそのまま当てはまるような気がする。

シモンの言うとおり、問われているのは単なる大学制度ではなく、大学のあり方の根本であり、自明とされていた前提そのものなのである。例えば、知識の獲得（研究）と伝達（教育）は決して無条件に尊重されるべきものではなく、その人間的、社会的な意味が問われねばならない、というように。そうであるなら、大学の近代化合理化というような理解の仕方は、問題のわい小化であるばかりか、実は最も重要な部分を抹殺して、問題そのものをすりかえてしまうものなのである。こうして、問題をどの次元で受け止めるかによって大きな差異が生じることになる。制度改革など必要ないと言うつもりはない。ただその前にもっと本質的なものを認識し、これと正面から取り組んだ上でなければ無意味だというのである。

『私はこう考える』は、東大の教官たちのこのような認識の深化の軌跡を示しているが、この深化は静かに大学問題を研究した結果などではなく、処分は撤回さるべきか、授業はここで再開さるべきか、といった個々の具体的問題と正面から取り組み、不格好によるめくことによって得られたものなのである。そして、このような具体的問題こそ、カッコいい改革論議に花を咲かす前に苦しまねばならない本質的問題に他ならない。

（田中 仁彦）

II. レポート・論文の基礎知識

高校時代と大学生活との大きな違いは、おそらく自分の意志で時間を設計できるという自由な生活スタイルにあると言えよう。この差異は勉学方法にも表れている。とくにレポートや論文の作成作業を通して、講義等で与えられた知識を整理するだけでなく、各人の興味・関心にしたいがい主体的に新たな諸知見に挑むことが求められているからである。

この意味において大学図書館の役割は計り知れない。図書館こそ大学の中核であり、図書館の質によって大学の質も決まると言い得る。図書館は司書によって運営され、その役割はこの上なく重要である。多量の情報の中から確実有効な情報を手に入れるためには、司書の助けを必要とする。しかしすべての情報を一つの大学図書館で入手することは事実上不可能である。ここでも、司書の手助けに頼らざるを得ない。

とはいえ知識の整理・獲得は、いわば大学における勉学の初歩にすぎない。自分の考えを秩序立てて他者に伝える能力を身につけなくてはならないからである。口頭発表ならびに文章表現という二様のコミュニケーション能力を養成する必要がある。これら二つのコミュニケーション形式の基盤にあるのが、レポート・論文作成の基礎知識である。口頭発表能力については、今後、フランス文学科のさまざまな講義において大小さまざまな口頭発表の機会を増やし、各教員の指導のもとに発表能力を体得していくよう努めなくてはならない。したがってここでは、文章表現を提示するための基本について述べる。

アイデアがすべてであって、いかに表現するかは二次的なものとして軽視される傾向がある。これは重大な過ちである。この「Comment」「いかに」がじつは各人の個性を発揮しうる無限の可能性を秘めたことであり、「Idées」「イデー」自体は思いのほか限られているという事実を忘れてはならない。またどれほど素晴らしい発想も他者に伝わらなくては話にならない。「表現する」ことによって得られる「歓び」は味わい深いものである。いわゆる発想を表現し提示する方法に無知であるためにこの歓びが感得できないとしたら、何と悲しいことか。「いかに」に、つまり「形式」にこだわる所以である。これだけは、誰もが習得し得ることだからである。

とはいえ、絶対的な形式などありはしない。基本知識をベースに、各自が独自の方法を開拓すべきであることは言うまでもない。

紀伊國屋制作のビデオ教材(『図書館の達人 6: 論文・レポートのまとめ方』、Kinokuniya, 1993)によって、ごく一般的なプロセスを示すことから始めよう。

レポート・論文をまとめる10のステップ

前提 (1) 問題意識 (2) いい資料 (3) 自分の主張を論理的にまとめる。

- 1) テーマ決定。
- 2) 事前調査。
- 3) 仮アウトラインの作成。
- 4) 関連文献の調査。
文献カード(通し番号を付す)に記録(雑誌(新情報)、新聞情報「切り抜き情報誌」も重要。)
- 5) 文献の入手。
- 6) 情報カード: (a) 引用 (b) 内容のまとめ (c) 気付いた自分の意見。
- 7) 最終アウトラインの作成。
- 8) 執筆と校正(自分の意見を論理的、客観的に書く)。
- 9) 出典の明示(学問的誠実さ)。
- 10) 仕上げ。

§1. レポート・論文の構成

レポートも論文も基本的に以下の四部構成である：

- 1) 目次
- 2) 本文：①序論（はじめに、プロローグ）②本論 ③結論（おわりに、まとめ、エピローグ）
- 3) 注（脚注）
- 4) 参考文献表

レポートも論文の核をなす「本文」が大半を占め、重要であることは言うまでもない。この点については後で詳述することにして、まず、1)3)4)について簡潔に記す。

目次：読む側にとっては、一瞥して全体の論旨展開が把握できるし、書き手の側においても、執筆プランとの関わりで自己の主張が論理的であるかを判断する格好の場になるという、双方にとって利点がある。つねに適切なプランを心掛けておけば目次は自ずと仕上がっていく。小規模のレポート・論文では省略してもよい。

注：大学におけるレポート・論文は、漠然と感想を書き綴るものではない。多くの研究者の諸説やさまざまな資料・データを援用しながら、自己の考え、主張を第三者に理解できるように整然と論理的に構成されていなくてはならない。そこで、諸出典を明示する「注」を伴う必要性が生じる。各章末あるいは結論の後にまとめてよいが、できることなら、脚注を勧めたい。

参考文献表：レポート・論文の執筆に際して、利用したすべての文献の一覧表である。引用文献のみならず、参考資料・文献等も加えてよい。言及できなかった関連文献については、その旨、本文ないしは注で記しておくといよい。「参考文献表」の作成については、以下の「§ 10」を参照。

本文：

①**序論**（はじめに、プロローグ）：レポート・論文で展開したい自己の問題意識、課題、仮説を提起する。さらに卒論のように長い論文においては、本論の構成を説明し、論旨の展開や用いた方法を記す場である。序論は結論と同様に、あるいはそれ以上に「読者」の関心を引き付けるという最も重要な役割を担っている。冒頭の一行も大切である。すべてを書き上げた後で、じっくり序論を練り上げるべきだが、序論を書くことで自分が「何を書きたいのか」「何を主張したいのか」を明確に知ることができる。

また、自分の論文の位置付けやその独自性を表明する場でもある。それまでの研究状況の概観や主な研究の動向等を指摘しておきたい。

②**本論**：序論で提起した問題に即し、原テキスト・データ・資料等に基づいて論旨を展開する論文の主要部分である。積木を一つずつ積み上げていくように自ら提起した問題を論理的に整理し、説明・分析・論証してゆくところに、レポート・論文作成の最大の意義とこの上ない「歓び」がある。説明・分析・論証には研究内容と不可分のさまざまな方法があり、したがってアプローチの仕方も対象によって異なる。これらに習熟するには自ら論文作成作業を少しずつ体得してゆく以外にない。しかし、レポート・論文の作成を通して、自らの考えや主張で論理的に構築する訓練を積み重ねてゆくことは、実生活のあらゆる面において必ずや役に立つはずである。

③**結論**（おわりに、まとめ、エピローグ）：序論で提起したテーマに立ち返って、本論での分析や論旨の展開によって導かれた結論を記す。そのために必要であれば論文全体を簡潔に辿ることもよい。本

文で十分に展開し尽くせなかった今後の課題や、研究の過程で発見した問題点も付記してよい。

§2. レポート・論文のテーマ決定上の注意

受講科目のレポートなどのように教員によってテーマが提示されている場合。

- ① まず第一に言えることは、自分のテーマはできるだけ早期に決定すべきだ、ということである。原テキスト、参考文献、資料等を読み進めていくにしたがって、軌道修正を余儀なくされるものである。「仮のテーマ」を立てて、研究をまず始めることが大切だ。
- ② 出題の意図を明確に把握する。
- ③ 出題意図に照らして、自分の問題意識を絞り込む。問題をできるかぎり限定することで研究の意図、目的がより明確になり、研究を着実に進展させることができる。
- ④ 受講科目のなかで習得した知識にのみに頼らず、全学共通科目、その他の専門科目、読書を通して得た知識をすべて動員するよう努める。
- ⑤ 一度決めたテーマは徹底的に押し進めるべきである。しかし、決定的な資料や文献の不足等で研究に限界ありとの判断に至った場合には、思い切ってやり直す勇気も必要である。この意味においても、早めに作業を開始しておく必要がある。

§3. ノートの作成

原テキスト、参考文献、資料、データ等を読むに際して、必ずメモをつけ、執筆の際に役立つように情報の整理をしておかなくてはならない。そのための三つの注意を以下に記す。

- ① 各種情報の記録：①大学ノート ②ルーズリーフ ③カード方式 ④パソコン利用
これら四つに大別できる。しかしそれぞれ一長一短あり。自分なりに方式を早期に確立し、一度決めたらそれを一貫して守り抜くことである。
- ② いずれの方式においても、メモにはすべて情報の出典箇所（著者名、文献等タのイトル、出版社、出版年、頁等、さらに外国の文献の場合は出版地も記録）を記入しておくこと。これを忘れると、執筆段階で時間をロスするのみならず、せっかく収集した重要な文献等を引用できなくなってしまう。注や文献表作成に役に立つ。
- ③ 記録したすべての情報には「見出し」を付し、自在に検索できるように工夫する。

§4. プランの作成

随筆や短文であれば、思い付くままに書き進めることも可能である。他者に事実や自らの考えを正確に伝えなくてはならないレポートや、さらに自己の主張を読み手に納得させる「論文」においては、プラン（見取り図）の作成が必要になる。プランができていれば、まず全体の輪郭を把握することができ、また執筆の過程で各章、各節、各項の論理的結構を吟味したり、論旨展開の流れが乱れるのを防ぐことができる。つまり、プランは大海を航海するための羅針盤である。

出発点における「プラン」は「机上の空論」とも言い得るもので、原テキスト、さまざまな参考文献等を渉猟することによって当然「軌道修正」を余儀なくされる。思索、読書、メモを取る、執筆といった作業を繰り返すことによって理想的な「プラン」へと近付いていくものである。「書く」行為が最も有効な思索を促し、新たな発想を生み出す。

プランを作成する上で四つの注意点を挙げる。

- 1) 自己の問題意識、思考過程を明確にするためにも、できるだけ早い段階でプラン作りに着手すべきである。「たたき台」としてのプラン作りが先決である。

- 2) 作成したプランに則り、原テキスト、文献等を読破し、メモやノートを作成、分析を進めていくにしたがって、プランを随時より具体的なものと改善していくように心掛ける。
- 3) 最終的には、章、節、項にしたがって詳細なプランを作成する。
例えば：章には、I. II. III.、節には、1.2.3.、項には、(1)(2)(3) で表記する。こうした「見取り図」が構築できれば、各部分で書くべき内容が明確になり、同時に論旨の逸脱を回避できる。しかも知識の不足、情報や資料不足等を事前に知ることができる。
- 4) 知識が深まるにつれて、「プラン」の大幅な変更を余儀なくされる場合も生じる。その際は、大胆に出直す勇気を忘れてはならない。

§5. 執筆の基本

- 1) 「わたしは」ではなく「われわれは」で記述することが原則である。したがって、主観的な表現や感情移入は避け、客観的な表現に徹する。
- 2) 自説と他からの情報ないしは他者の説とを明確に区別する。そのために「.....」を使って引用したり、注を付す必要が生じる。ただし、一般的に認められた事実については引用箇所を明示する必要はない。
- 3) 「誰が読んでも理解できるように書く」をモットーとし、極力平易な文章を綴るように努める。凝った文章や複雑な構造をもった文章は避けるべきである。
- 4) 集中力を発揮して、論文の各部分は一気に書き上げるように訓練する。文章に仕上げるのがでなかった箇所については、曖昧なまま放置せず、少なくとも論旨の展開を箇条書きにしておく。

§6. 論文文体と全般的注意事項

- 1) 「である」調を基調とし、話し言葉は使わない。
- 2) 文章の導入部（書き出し）に十分注意を払う。
- 3) 段落は多めにし、長い文章は極力避け、文章を軽快に、読者に読み易くなるよう配慮する。
- 4) 「小見出し」を付すことで論旨の展開を明解にする。読者のみならず、執筆を助ける。
- 5) 形容詞、副詞の濫用と、同じ言葉、表現の繰り返しは避ける。
- 6) 用語の統一性に留意する。例えば、「ルネサンス」、「ルネッサンス」等いずれかに統一すべし。
- 7) 読者の理解を助けるべく、文章ではあまり煩雑になりうる箇所には「箇条書き」や「図式」を活用する。
- 8) 論旨展開の説明や留保などはできるかぎり「注」におとし、本文論旨が明解に伝わるように心掛ける。
- 9) 「...当然である」といった短絡的な主張は、論文の質を低める。根拠や理由を丁寧に明示する。
- 10) 句読点、引用、強調などの括弧には1マス分当てる。パラグラフ（文節）の最初は1マス分空ける。
- 11) 本文中の欧米人の氏名作品名の扱い方：
一人名が初出の場合：そのカナ書きの後に原語をつけ、あわせて生歿年を記入すること。
それ以後はカナ書きだけでよい。批評家など生歿年不明の場合は記入しなくてよい。
例：エミール・ゾラ (Emile Zola, 1840-1902)、フィリップ・ソレルス (Philippe Sollers, 1936-)

ー作品はその和訳名を二重括弧でかこみ、初出のときはその後に原題（イタリックで示す）と発表年を記入する。

例：スタンダール（Stendhal, 1783 - 1842 ） の『赤と黒』（*Le Rouge et le noir*, 1830）

ー詩集、短編集、評論集のなかの一遍だけを挙げる場合は下記による。

例：「ミラボー橋」（« Le Pont Mirabeau »）

§7. 注の表記

本文を書くに際して、参考とした資料や文献があるときは、注をつける。注のない論文は評価の対象外である。何も参考としない記述は論文ではなく、エッセーとなる。参照あるいは引用した文献がありながら注をつけない場合は、著作権の侵害となる。

1) **注の種類と目的**: 注には、補足としての注と典拠としての注がある。

論文は、その本文の全体の論旨が明確となるように、構成と記述がなされなければならない。文章がすっきりと読めるように、関連するゆえ言及が必要だが中心的ではない事項は注として欄外で確認されるものとする。これにより、著者は自分の主張や説明の証拠を示すことが、また読者はその主張を検証することが可能となる。

文の内容について補足的説明をする注：本文中に入れると全体の流れをずらせてしまうが、本文で取り上げている事項の理解を一層高める情報や解説を行う。

文中の用語や引用の出典を明示する注：研究対象の原典、参考にした先行研究、論文中で用いた専門用語など、資料からの引用部分の典拠を示す。

2) **注の書式**: 注の形式としては、現在はページごとの脚注形式が一般的に用いられる。

3) **注番号の付け方**: 注をつけるべき語句や文章のあとに、注があることを示す数字を付ける。

「最も美しい宗教である恋愛⁶⁵」 → 括弧内の引用全体を対象とする

それは空想の自画像なのである⁵。 → 文全体を対象とする

パリという大牢獄³³の中の囚人 → 直前の語句にかかる

§8. 引用箇所の表記

テキスト、先行研究等からの引用や要約には、必ず注をつけて典拠を示さなくてはならない。本文に組み込むことも可能だが、各ページに脚注として示すのが望ましい。短い引用文は本文中に組み込み、長い引用文は本文とは独立させる。

1) 改行のない短い引用（本文挿入引用句）：

日本語での論文の場合、本文中での引用文は一重カギ括弧「…（中略）…」で囲む。

フランス語での論文の場合、引用文は引用符 *guillemets* « » で囲む。フランス語での中略記号は[...]

guillemets に代えて、英語式の引用符 *quotation marks* “ ” を用いる場合もある。

2) 改行を伴う長い引用（独立引用文）：引用文の前後を1行空ける。括弧は不要。

ー日本語語文の場合、引用文であることが明白なように、全文にわたって行頭から全角2文字分下げて記載する。

ーフランス語文の場合、半角 4 文字分下げて記載する。

- 3) 引用文は原文に忠実に。引用文に誤りがあつたり、引用した訳に問題がある場合には、注記すべし。
- 4) 直接引用しない場合でも、他者のアイデアや他から得た論展開に重要な情報は出所を明示する。関連情報等を参考注として付記してもよい。
- 5) 引用の終わり：短い引用の場合、引用文を閉じる括弧あるいは引用符の前に、注番号をつける。長い引用の場合、引用文の最後の句点（。）あるいはピリオド（.）の前に、注番号をつける。

§9. 引用文献の表記方法

- 1) 表記法の基本的原則：
単行本：①著者氏名、②本のタイトル（翻訳書の場合、訳者名を加える）③出版社、④発行年、
⑤引用文の所在頁 の順。
雑誌：①著者氏名、②論文等のタイトル（翻訳論文の場合、訳者名を加える）③雑誌名、
④発行年月、
⑤引用文の所在頁 の順。
- 2) 文献表記の末尾には、邦文文献の場合には句点（。）を、欧文文献の場合にはピリオド（.）を忘れないように。

(1) 邦文：

- 1) 単行本：
渡邊義愛『ホイスト・ゲームのカードの裏側』、国書刊行会、1998 年、99-100 頁。
- 2) 雑誌論文：
橋本一明「不幸への捨身」、『世界文学』第 4 号、1966 年 9 月、34 頁。
- 3) 講座・論文集所収論文：
渡邊義愛「カトリック小説」、『フランス文学講座』、第 5 巻『小説 II』所収、大修館書店、1979 年、256 頁。
- 4) 翻訳書：
ピーエル・ブリュネル他『文芸批評の新展望』、平岡昇他訳、白水社、クセジュ文庫、1983 年、55 頁（Pierre Brunel et alii, *La critique littéraire*, PUF, coll. « Que sais-je ? », 1977）。
- 5) 翻訳論文集所収論文：
ジェラルド・ジュネット「純粹批評の根拠」、ジョルジュ・プーレ編『現代批評の方法』、理想社、1968 年、213 頁（Georges Poulet (ed.), *Chemins actuels de la critique*, Paris, Plon, 1967）。
- 6) 再出文献の注：
①直前の注に引かれている場合： 同上 36 頁。
②いくつか前の注に引かれている場合、著者名を付す：
渡邊義愛、前掲書、18 頁。
渡邊義愛、前掲論文、66 頁。

③同一著者による文献が複数引かれている場合、書名を付す：

渡邊義愛『ホイスト・ゲームのカードの裏側』、29 頁。

7) 新聞：新聞名（発行地）、年、月、日。ページ数は不要。

(2) 欧文文献：

単行本のタイトル(副題があれば、それも含めて)および雑誌名はイタリックにする。論文のタイトルは「 」の中に入れる。

1) 単行本：

Northrop Frye, *Anatomie de la critique*, Paris, Gallimard, 1969, p. 336 (単一ページの場合), pp. 63-65 (複数ページの場合).

2) 論文集：

Georges Poulet (ed.), *Chemins actuels de la critique*, Paris, Plon, 1967, pp. 132-135, 227.
(編者は (ed.) で示す。複数の著者がいる場合で、それらの代表者のみを示す場合は、Goreges Poulet et alii とし、他の著者を省略する。)

3) 雑誌論文：

Gilbert Nigay, « Les bulletins et publications de « Sociétés d'amis » (1900-1967) », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1967, pp.792-802.
(雑誌は刊行年ばかりでなく、巻(Vol. VIII)、号 (No 2)、刊行月等・年 (février 1967) を表記する場合も多く見られる。)

4) 論文集所収論文：

Richard Kearney, « Le mythe chez Girard, un nouveau bouc émissaire ? », in Paul Dumouchel (ed.) *La Violence et le sacré*, Grasset, 1985, pp.35-49.

5) 再出文献注：

①直前の注に引かれている場合：*Ibid.*, p. 35. (イタリックに)

②いくつか前の注に引かれている場合、著者名とともに：

Pierre Brunel, *op. cit.*, p. 77. (イタリックに)

③同一著者による文献が複数引かれている場合、書名を加える：

Pierre Brunel, *Le mythe de la métamorphose*, p. 65.

6) 本の発行地が不明の場合 (s. l. =sans lieu)、出版年が不明の場合 (s. d. =sans date)。英文の場合 (n.p.) (n.d.)。

7) 新聞：新聞名（発行地）、日、月、年。

§10. 参考文献表

参考文献表は、論文を作成するために利用したテキストや資料などに関する情報を一覧にして示す目録のことである。

直接本文のなかで引用していなくとも、参考にした作品や論文はすべて文献表に載せる。

- 1) レイアウト：文献情報が多い場合は、情報の種類によって分類する、あるいは文献の言語によって分類するなどの工夫をすると有用なものとなる。一般的には、原典など第一次資料、書籍、雑誌、論文、新聞・雑誌の順に分類して掲載する。
- 2) 記載順序：著者名別に記載し、その五十音あるいはアルファベット順に並べる。
- 3) 日本語文献：上記（9. 引用文献の表記方法、（1）邦文）を参照。
- 4) 欧文文献：表記は、「注」の場合と異なり、次の様に記載する。記述が複数行になる場合は、2 行目以降の行を文頭から下げる（日本語でも同様）。

（例 1） BERGUEZ, Daniel, *L'explication de texte littéraire*, 2e édition, Paris, Dunod, 1996.

（例 2） Tadié (Jean-Yves), *Proust et le roman*, Gallimard, 1971.

－著者が複数の場合：

Welleck (René), Warren (Austin), *La Théorie littéraire*, Paris, Seuil, 1971.

－編者名を示す場合：

BEHAR, Henri, FAYOLLE, Roger (ed.), *L'Histoire littéraire aujourd'hui*, Paris, A. Colin, 1990.

－雑誌論文の場合：

著者名（氏、名の順）、《タイトル》、in（もしくは dans）定期刊行物名（イタリック体で）、シリーズ名、巻数、発行年、掲載ページ数。

Ex.：

Quémar (Claudine), « Sur deux versions anciennes des "côtés" de Combray », in *Etudes proustiennes* II, 1975, pp.159-282.

§11. 推敲

論文が書き終わった後、じっくり読み直し、推敲する時間的余裕を忘れないこと。

- 1) 読む人の立場にたって、繰り返し読み直し、推敲する。音読は効果的である。
- 2) 誤字、脱字のないように注意する。ワープロで文章を作成するものは特に注意を要す。
- 3) 図版、表など：本文との整合性を確認する。
- 4) 用語の統一。

（本項目「レポート・論文の基礎知識 § 1-11」は、「第 4 章 レポート論文作成の abc」、『地域研究のすすめ--フランス編』（外国語学部）をベースに執筆した。小田桐 光隆＋澤田 肇）